

姉ちゃんは  
私が面倒をみる

「姉ちゃん、これを食べべやんせ」  
マサ子さんは、いつもお姉さんのヨシ子さんのそばにいました。  
ヨシ子さんとマサ子さんは、『よかあんべ』を利用する姉妹です。  
ヨシ子さんは要介護5。食べることも移動することも話すことも自力ではできません。妹のマサ子さんは、ヨシ子さんが大好きで、「私が姉の面倒をみる」と口癖のように言いました。

マサ子さんは料理が得意で、よく台所に立って皆の食事を作ってくれました。明るく冗談も上手で、『よかあんべ』のムーディーカー的存在でもありました。マサ子さんも認知症で直前のことを忘れてたり、同じ話を繰り返すこともありましたが、野菜や果物を売る商売をして一人で生き抜いてきた経験について「年に何回かはお得意さんを旅行にお連れして喜ばれていた」「いつもたくさん売っていたよ」と、得意げに話してくれました。  
ある日、皆でお菓子を食べようと配っていたときには、「なんと、うちの姉さんに最初に配つ

最終回

認知症の人が  
最期まで「生ききる」暮らしの支え方

# その人らしく 最期まで生ききる姿 を支援する

マサ子さんの姿に筆者が感じたことを通し、  
連載テーマ「生ききる」にこめた思いをあらためて考えます。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

てあげないのね。うちの姉さんは自分からほしいと言えないし、手を出して取ることもできないんだよ」と、マサ子さんがヨシ子さんの気持ちを切実に代弁しました。今でも忘れられない出来事です。

突然の入院・手術

ある日、マサ子さんは身体の

不調を訴え、入院。そのまま手術となりました。病名は直腸がん。手術によってストーマ(人工肛門)が作られました。

「あれほどお元気だったマサ子さんが何故、こんな病気になるってしまったのだろう」「これからどうなるんだろう、またヨシ子さんと一緒に居られるのだろうか。僕たちは不安でいっぱいになりました。」

マサ子さんは結婚をされておらず、子供もいません。ヨシ子さんの娘さんが母親のヨシ子さんと叔母さんにあたるマサ子さん、同時にお二人の介護をすることになりました。

ヨシ子さんの娘さんは、「母と叔母と一緒に居させてあげたい」との思いで、在宅での介護を選択しました。

しかし、初めて見る人工肛門。装具の取り扱い方など、不安でいっぱいだったと思います。マサ子さんはおなかについている袋が何かわからず、違和感から時には外してしまうこともありました。そのたびに洋服や布団の交換。ヨシ子さんの娘さんとは不安と苛立ちの連続のなか、いろいろな工夫をしながら、一生懸命に姉妹を支えました。

最期まで一緒に

あんなに元気だったマサ子さんも病気には勝てませんでした。次第に食欲はなくなり、体力が落ち、声にも力がなくなってきました。それでもおなかの痛みを堪えながら、ヨシ子さんのそばでヨーグルトを食べさせたり、一生懸命

## 認知症の人が最期まで「生ききる」暮らしの支え方



にお姉さんを支えています。

だんだん布団から起き上がる  
ことができなくなり、目を閉じ  
ている時間も増えてきました。少  
しでもお二人を一緒にと、ヨシ子  
さんと同じ布団でお昼寝をして  
もらうこともありました。

二人の間には会話はありませ  
ん。しかし僕たちは、何か心と心  
で語り合っているような雰囲気  
を感じていました。

これまで、美味しい料理を振る  
舞ってくれたり、笑わせてくれた  
マサ子さんに対して、今度は他の  
認知症の利用者がスタッフと同  
じようにかかわってくれました。  
認知症のため、名前は覚えていら  
れませんが、優しい言葉を



かけながらマサ子さんの顔を拭  
いてくれたり、頭を撫でてくれ  
ました。当時の『よかあんべ』で最  
高齢だったおばあちゃんも、なか  
なか目を開けないマサ子さんに、  
「元気を出せ、薬をしつかり飲む  
んだよ、ご飯も食べなさい」と枕  
もとで語りかけました。

マサ子さんは皆が見守るなか、  
永遠の眠りにつきました。

その生きざま、死にざまを通  
して僕らにたくさんの思い出を  
残し、多くのことを教えてくれ  
ました。

若い頃から、朝から晩まで一  
生懸命働き、自分の商品を買っ  
てくださるお客様を大切にし、  
その喜ぶ笑顔にまたご本人も喜  
んでおられた。そして認知症に

なつてからも大切なお姉さんを  
常に支え続け、共に過ごす周囲  
の人にもいつも笑顔を振りまいて  
いました。

食事が食べられなくなり、補  
液の点滴も入らなくなつてから  
も、一生懸命に最期の最期まで  
生き続けました。マサ子さんは  
僕らに、まさに「最期まで生き  
る姿」をしつかり見せてくれま  
した。

### 生ききる姿を 支援する

「僕は、これまでたくさんの失敗  
をしてきました。もちろん、嬉し  
かつたこともたくさんありまし  
たが、後悔のほうが多いです。言  
い換えれば、後悔したケースがそ  
れだけ印象深く残っているとい  
うことかもしれません」。

僕は1年前、この連載をこん  
な言葉で始めました。そして、今  
回でいよいよ最後となります。  
連載という機会をいただき、あ  
らためてこれまで出会った方々、  
その方々との場面をじっくりと  
思い起こすことができました。

僕が現在運営している法人の  
理念の一つに、「その人らしく最  
期まで生ききる姿を支援する」

と掲げています。

僕たちがかわるのは高齢者  
です。加齢と共に身体機能は次第  
に衰え、当然、認知機能の障害も  
あります。

しかし、嬉しいとか、悲しいと  
か、楽しいとか、寂しいとか、本来、  
人間として持ち得る感情を最  
期まで思う存分表現し、「自分と  
いう一人の人間」を最期まで表  
現していただきたいと強く願っ  
ています。

「その人らしく最期まで生き  
きる暮らしを支援する」とは、一  
人ひとりが最期の最期まで「私  
は『私』です」と伝えられる、感  
情で伝えられる環境を作ること、  
もしくはそれができなくてもそ  
の生きざま、死にざまに寄り添  
うことでしょうか。これを目指し  
続けたいと思っています。すべて、  
この連載中に書かせていただい  
た方や、その他の出会った方々  
が教えてくださったことです。

お陰様で最終回を迎えるこ  
とができました。拙い文章にお  
付き合ってください読者の皆様  
に感謝しています。本当にあり  
がとうございました。またどこ  
かでお会いできることを楽し  
みにしています。